国立国語研究所学術情報リポジトリ

出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平子, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002420

出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について[1]

平子　達也*

１　はじめに

本稿は，出雲方言の形態統語面に関する初期的な報告として，この方言における格助詞「ガ」と「ノ」について，その分布の概略を記述するものである。なお，筆者のこれまでの調査からすると，格体系（格の配列および格助詞の現れ方）については，基本的に出雲方言内部での差異はないと言って良い。それ故，本稿では出雲方言内部の変異については特に触れない。基本的に本稿で用いるデータは出雲市大社町（以下，大社方言）および仁多郡奥出雲町佐白（以下，佐白方言）での筆者自身の調査によって得たものである。

本稿の構成は以下のようになっている。まず２節では出雲方言を含めた日本語諸方言における「ガ」と「ノ」の現れについて触れた先行研究を概観する。３節で，出雲方言における連体助詞「ガ」「ノ」の現れについて記述し，続く４節で主語を表示する「ガ」「ノ」の現れについて記述する。５節はまとめである。

２　先行研究の概観

本節では，出雲方言を含む日本語諸方言における格助詞「ガ」と「ノ」（あるいはそれに対応する形式）の現れについて扱った先行研究を概観する。

２．１　出雲方言における「ガ」「ノ」に関する研究

管見の限り，出雲方言において現代日本語標準語とは異なる格助詞「ガ」「ノ」の現れ方があることを指摘した最も古い研究は，加藤（1935）である。この加藤の研究は，旧大原郡（現雲南市）出身である加藤自身の内省によるものである。加藤は「主語を表はすに，一般にガを添える所へノを用ひる事が多い。ガは同輩以下への親稱であり，ノは同輩以上への敬稱である」と述べている。以下の（1a-d）は加藤があげている例文であるが，これらの例文を見る限り，「ガ」「ノ」に関する加藤の記述が「主語を表はす」場合に限らず，所有などを表わす連体助詞として用いられる場合にも当てはまることだと分かる（なお，以下の（1）の例文は標準語訳も含めて加藤における表記をそのままに引用している。ただし下線は本稿の筆者による）。

（1）　加藤（1935）における例文[2]

---

*　ひらこ たつや：実践女子大学・助教

[1] 草稿の段階で国立国語研究所の坂井美日氏から多くの貴重なコメントをいただいた。また，九州大学の下地理則氏には調査内容などについて多くのご助言をいただいた。両氏に心から感謝申上げる。水谷（1980）など先行研究について様々にご教示くださった友定賢治氏（県立広島大学名誉教授）には，小西いずみ氏（広島大学）とともに出雲地域諸方言の調査でも種々御世話になっている。本稿の内容の一部についても，友定氏や小西氏には御意見・御助言をいただいた。記して感謝申上げる。

(a)　オマエガホンダ（お前の本だ）
(b)　ソラオマエガエツィダ（それはお前の奴（物）だ）
(c)　シェンシェノゴダッシャッタ（先生が来られた）
(d)　ショーヤサンノエワッシャッタ（庄屋さんが言ひなさつた）

広戸（1949: 82-83）では，上記の加藤の記述を引用している以外には「ガ」「ノ」に関する記述はない。加藤や広戸の研究の後，出雲方言における「ガ」「ノ」に関する記述はほとんどないが，旧大原郡木次町（現雲南市木次町）の方言における敬語法に関する記述である水谷（1980）では，「親しみ・ていねいの意識の認められる表現法」の一つとして「助詞の「ノ」と「ガ」の使い分けによるもの」があげられている。そこでは，「ガ」「ノ」が主語を表示する場合と，連体助詞として用いられる場合のどちらともについて記述されている。水谷の主張は以下のようにまとめられる。

(2)「ガ」と「ノ」の使い分けに関する水谷の主張
(a)「ガ」と「ノ」が主語を表示するのに用いられる場合，老年層では目上の人に対して「ガ」をもって表現することは失礼だという認識が強く，「ガ」と尊敬法助動詞は共起しないなどの制限がある。ただし，中年層あたりからはそういった認識は弱くなっており，若年層にあっては主語を表示するのに専ら「ガ」が用いられるようになっている。
(b)「ガ」と「ノ」が連体助詞として用いられる場合，老年層では，一人称名詞「オラ」や親しみのある人物（おじさん）や目下の人（子ども）などを表わす名詞に続けて「ガ」を用いることがありうる。ただし，中年層・若年層では連体助詞として「ガ」が用いられることはほとんどなく，「ノ」が専ら用いられる。

水谷の「ガ」と「ノ」に関する記述は，あくまで「敬語法」に関する記述の一部である。「ガ」や「ノ」の前に現れる名詞としては，一人称名詞・二人称名詞の他に人名や親族名称があるだけである。

その他，出雲方言において（主節における）主語を表示するのに「ノ」が用いられることがあるとの指摘が神部（1982: 233）にあるが，当時「すでに衰微の相が明らかである」としている。

２．２　出雲方言以外の方言（言語）における「ガ」と「ノ」に関する研究

「ガ」と「ノ」（もしくはそれらに対応する形式）の使い分け（分布）に関する研究は，特に九州諸方言と琉球諸語で進んでいる。

例えば坂井（2013）は現代熊本市方言における主語表示に関する記述であるが，そこでは「ガ」と「ノ」の使い分けに関して，主語に立つ名詞句の性質（人称名詞か否か）と述語の性質が関わるとされている。即ち，人称名詞が主語に立つ場合には専ら「ガ」が用いられる一方，人称名詞以外が主語となる場合には述語の性質によって「ガ」と「ノ」が使い分けられる。坂井の記述に

[2] ここにある例だけを見ると連体助詞としては「ガ」，主語を表示するのには「ノ」というような分布を示しているように思われるが，そうではないと思われる。加藤は，「（「ガ」は）主語を表はす場合に用ひられ」るとしているし，また，「一體言が他の體言を修飾する際のノは一般である」などと述べている。加藤は格助詞「ガ」「ノ」の用例として（1）にあげた4つの例文しか示していないが，おそらくこれは「標準語」と異なるものだけをあげたためだと思われる。

よれば，他動詞述語文と意志自動詞述語文の主語は「ガ」で，非意志自動詞述語文と形容詞述語文の主語は「ノ」で表示される。また，敬語接辞やアスペクト辞の有無によっても「ガ」「ノ」の使用のあり方が変動しうるという。

鹿児島県甑島里方言では，熊本市方言における「ガ」「ノ」の使い分けに関わる要素に加えて，主語に立つ名詞句が名詞句階層のどの位置にあるかも「ガ」「ノ」の使い分けに関わるという（平塚・森・黒木 2015: 91-95）。また，連体助詞として「ガ」「ノ」が用いられる場合には，その使い分けは以下のようにまとめられる（同 96-98。表1と2はp.97の表24と25をもとにして作成した）。

表1　甑島里方言における連体助詞「ガ」「ノ」（待遇なし）

人称名詞		親族・固有名詞	人間名詞	動物	無生物
一人称	二人称	（同等・目下）	（同等・目下）		
=ガ	=ガ	=ガ，=ノ	=ガ，=ノ	=ノ	=ノ

表2　甑島里方言における連体助詞「ガ」「ノ」（待遇あり）

二人称	親族・固有名詞	人間名詞
（目上）	（目上）	（目上）
=ノ	=ノ	=ノ

琉球諸語における「ガ」系助詞・「ノ」系助詞の使い分けについては，記述的・理論的あるいは歴史的研究が幾つかある。例えば，南琉球語に属する宮古語大神島方言（大神語）では，「ガ」系（=*ka*）はそれが続く名詞が名詞句階層の上位にある場合に用いられる一方，「ノ」系（=*nu*）は名詞句階層の下位にある名詞をとる（Pellard 2010: 143）。この使い分けのあり方は，=*ka*と=*nu*が連体助詞として用いられる場合でも，主語を表示するのに用いられる場合でも当てはまるという。大神語に見られるような当該の助詞が続く名詞の名詞句階層上の位置による「ガ」系と「ノ」系の使い分けは，琉球諸語全般に広く見られる。

近年では，琉球諸語におけるケースマーキングに関する記述的研究の深化に伴って，それらに関する類型論的・歴史言語学的研究が下地理則氏らによって進められている。その研究過程において，下地氏は琉球列島言語史のある段階で「ガ」系と「ノ」系とが（主語表示をする場合に）動作主性の度合いによって使い分けられていた可能性を指摘している[3]。

歴史的な研究としては，特に8世紀およびそれを若干遡る時代の日本語中央方言（上代語）における「ガ」「ノ[4]」の使い分けに関する研究が多くある。Frellesvig（2010）は，日本語史に関する欧米の言語で書かれた教科書的概説書であるが，そこでは，上代語における主語を表示する助詞の「ガ」は人間（もしくは擬人化された動物・無生物）をreferする名詞をマークする場合にしか用いられず，「ノ」は如何なる名詞をもマークするという（Frellesvig 2010: 128ff）。なお，主節において「ガ」「ノ」が主語を表示することは基本的にはないというが，どういった環境で「ガ」「ノ」が主語を表示することができるのかについては種々の意見があり，未だに議論は続

[3] 下地氏の一連の研究発表（下地・坂井 2015など）とそれらの発表の場などにおける個人的な談話にもとづく。

[4] 上代特殊仮名遣では乙類仮名で表記される。

いている（cf .Osterkamp 2014[5]）。

２．３　本節のまとめ

この節では，出雲方言を含めた日本語諸方言における格助詞「ガ」「ノ」の使い分けなどに関する先行研究を概観した。先行研究からは，ある方言における格助詞「ガ」「ノ」の使い分けについて，（1）**敬意（待遇）**，（2）**名詞句階層上の位置**，（3）**動作主性**などが関わる可能性が有ると考えられる。また，上代語において主節では「ガ」「ノ」が主語表示に用いられないが，（4）**節タイプ**[6]によって格配列のあり方が変わってくる現象は通言語的に見てもままあることである。さらに，「ガ」「ノ」の振る舞いについて，主語を表示するのに用いられる場合と連体助詞として用いられる場合とで振る舞いが異なる方言とそうでない方言とがある。

以下では，出雲方言における「ガ」「ノ」の使い分けについて，主語を表示するのに用いられる場合と連体助詞として用いられる場合とに分けて記述を行う。議論の都合上，まず連体助詞として用いられる場合について記述し，後に主語を表示するのに用いられる場合について記述する。

３　「ガ」「ノ」が連体助詞として用いられる場合

本節では，出雲方言において「ガ」「ノ」が連体助詞として用いられる場合における両者の使い分けについて記述をする。大まかには，当該の助詞がとる名詞がreferする（指示する）ものが人間であれば「ガ」も「ノ」も用いることができ，動物・無生物をreferする場合には「ノ」しか用いることができない。この使い分けのあり方は，上代語における主語を表示するのに用いられる「ガ」「ノ」の使い分けについてFrellesvig（2010: 128ff）が指摘しているところと同じである。連体助詞として用いられる場合か（出雲方言），主語を表示する場合か（上代語）という違いはあるが，両者の共通点は注目される。なお，既に述べたとおり上代語の場合は連体助詞としての「ガ」「ノ」は動物・無生物をreferする名詞にも続く。

表3　出雲方言における連体助詞「ガ」「ノ」（待遇なし）

人称名詞		親族・固有名詞	人間名詞	動物	無生物
一人称	二人称	（同等・目下）	（同等・目下）		
=ガ，=ノ	=ガ，=ノ	=ガ，=ノ	=ガ，=ノ	=ノ	=ノ

また，「ガ」「ノ」がとる名詞がreferする人物が，話し手にとって敬意の対象となる場合には「ノ」しか用いることができない。この点は，甑島里方言と同じである。

表4　出雲方言における連体助詞「ガ」「ノ」（待遇あり）

二人称	親族・固有名詞	人間名詞
（目上）	（目上）	（目上）
=ノ	=ノ	=ノ

[5] Osterkamp（2014）は，中古語（9世紀から12世紀にかけての日本語中央方言）における所謂属格主語（genitive subject）に関する西洋における諸研究を広く扱った非常に有用なsurveyである。

[6] 節タイプによって格配列が変動する可能性は既に坂井（2013: 70）や平塚他編（2015: 91）でも触れられているが，坂井（2013）では「典型を見る目的」，平塚他編（2015）では「調査不足」を理由にして，議論を主節における格配列に限定をしている。

それぞれの場合における例は以下のとおりである（データは佐白方言）[7]：

(3)　連体助詞「ガ」「ノ」

(a)	{オラノ／オラガ}	テヌグイダワ	「私の手拭だ」
(b)	{オマエノ／オラガ}	テヌグイジャネーカネ	「お前の手拭ではないか」
(c)	{オマエサンノ／*オマエサンガ}	テヌグイダワ	「あなたの手拭だ」
(d)	{オトーサンノ／オトーサン[8]ガ}	テヌグイダワ	「お父さんの手拭だ」
(e)	{ハナコノ／ハナコガ}	テヌグイダヨ	「ハナコの手拭だよ」
(f)	{アーノ／アーガ}	テヌグイダワ	「あの人の手拭だ」
(f)	{センセーノ／*センセーガ}	テヌグイダネ	「先生の手拭だね」
(g)	コリャ　{ネコノ／?ネコガ}	ケダワ	「これは猫の毛だ」
(h)	{ツィクエノ／*ツィクエガ}	ネズィダ	「机のネジだ」
(i)	{アーノ／*アーガ}	ネズィダワ	「あれのネジだ」

（この場合の「アー（あれ）」はある机をreferしている）

「ガ」「ノ」の前に来るものが複数接辞（-チ）を伴って「オラチ（私たち）」「オマエチ（お前たち）」などとなっても，表３と表４で示した「ガ」「ノ」の分布は変わらない。

なお，「A　{ガ／ノ}　B」という形式における連体助詞「ガ」あるいは「ノ」が表わすAとBの関係は所有や属性など様々であるが，現在までの調査ではAとBの関係によって「ガ」「ノ」の使い分けが異なってくるということを示す証拠は見つかっていない。例えば，「私が写っている写真」という意味でも「私の所有物であるところの写真」という意味でも「ガ」「ノ」の使い分けは見られず，どちらも「オラガ　シャスィン」あるいは「オラノ　シャスィン」（私の写真）ということができる。

また，表３で「ガ」の使用が許容されるものについては，「A　{ガ／ノ}　B」という形式のBにあたるものが形式名詞（当該方言では「ヤツィ」「ブン」など）の場合，あるいはBにあたるものが無表示で直接コピュラ（「ダ」）が続く場合には「ガ」が使用される傾向がある。少なくとも，調査時においてBが普通名詞である場合には，まず「ノ」を用いる形式が聞かれ，その後に「「ガ」も使用可」と確認がとれるということが多い。一方，標準語の「私の（もの）だ」にあたる当該方言における表現を尋ねると，まず「オラガ（ブン／ヤツィ）ダ」という「ガ」が用いられる表現が聞かれる。この傾向は，「ガ」「ノ」の前に現れる名詞が一人称名詞以外（二人称名詞など）であっても，表３において「ガ」の使用が許容されるとしたもの全てに見られる。もちろん「オラノ（ブン／ヤツィ）ダ」という表現も許容される。

ただし，この「オラノ（ブン／ヤツィ）ダ」という表現も含めて連体助詞として「ガ」も「ノ」も使用可能であるという場合，その「ノ」の使用が当該方言に伝統的にあったものなのか，ある

[7] 以下，出雲方言の例文はカタカナで表記する。中舌母音（[ɨ]）を伴う音節に関しては例えば「ツィ」などと示す。また，例文の後ろに「　」にて，対応する標準語訳を付す。なお，例文中左肩のアスタリスク（ * ）は，当該の形式が用いられないこと，クエスチョンマーク（ ? ）は非文法的とは言えないものの，その形式を用いないのが普通であると話者が答えたものであることを示す。

[8] この例文における「オトーサン（お父さん）」は，話者自身の父というよりは話者の夫であるなど，家庭内において「お父さん」と呼ばれる人物を指すものである。話者自身の父親を指す場合の「オトーサン」であれば，「ガ」は不適もしくはやや不自然（失礼）とされる。

いは標準語からの影響によるものなのかは分からない。このことは，４節以下で述べる主語を表示するのに「ガ」も「ノ」も用いられる場合にも当てはまる。即ち，主節の主語を表示するのに「ガ」も「ノ」も使用可能である場合，その「ガ」の使用が当該方言に伝統的にあったものか，標準語の影響によるものなのかを判断できないのである。

４　「ガ」「ノ」が主語を表示する場合

本節では，「ガ」「ノ」が主語を表示するのに用いられる場合について記述する。まず，「ガ」「ノ」の現れについて，その典型を見ることを目的に坂井（2013）にならって主節中の主語を表示するのに用いられる場合について記述をする。その後，連体節中の主語を表示するのに用いられる場合について述べる。

４．１　「ガ」「ノ」が主節中の主語を表示する場合

「ガ」あるいは「ノ」が主節の主語を表示する場合，その主語が敬意の対象となるときには（「ガ」とともに）「ノ」の使用が許容される一方，敬意の対象にならなければ専ら「ガ」が用いられる。

(4)　主節の主語を表わす「ガ」「ノ」（例は大社方言から）

(a)	{センセーノ／ガ}	コラエタヨ	「先生がいらっしゃったよ」
(b)	{センセーノ／ガ}	カケッチョラエル	「先生が走っていらっしゃる」
(c)	{センセーノ／ガ}	ソコニ　オラエーヨ	「先生がそこにいらっしゃるよ」
(d)	{センセーノ／ガ}	マクレラレタ	「先生がお転びになった」
(e)	{センセーノ／ガ}	（セートオ）タタカイタ	「先生が（生徒を）叩かれた」
(f)	{タローガ／*ノ}	カケッチョー／カケル	「太郎が走っている」
(g)	{タローガ／*ノ}	オル	「太郎が（あそこに）いる」
(h)	{タローガ／*ノ}	マクレタ	「太郎が転んだ」
(i)	{タローガ／*ノ}	ジローオ　クラワセタ	「太郎が次郎をなぐった」
(j)	{イヌガ／*ノ}	ネコオ　オイサゲチョー	「犬が猫を追いかけている」
(k)	{イヌガ／*ノ}	オーヨ	「（あそこに）犬がいるよ」
(l)	{クモガ／*ノ}	タイヨーオ　　カクス	「雲が太陽を隠す」
(m)	{タエフーガ／*ノ}	キタ	「台風が来た」
(n)	{ミズィウミガ／*ノ}	アー	「湖がある」

なお現在までに，主節の主語を表示する「ガ」「ノ」の使用について，動作主性や動詞の語彙的アスペクトあるいは時制・相などが影響を与えることを示す証拠は得られていない[9]。

注意したいのは，例えば（4a-e）において「ガ」ではなくて「ノ」を用いた場合，しばしばその後ろに続く述語動詞は尊敬の接辞を伴い コラエタ「来られた（いらっしゃった）」という形となることである。このとき可能性としては，主語となる名詞自体が敬意の対象となるかによって

[9] ただし，特に「ガ」の現れについては，所謂総記の「ガ」（久野 1973）に相当する類など情報構造に関わる現象について別に検討する必要がある。本稿はあくまで純粋に格の問題として「ガ」「ノ」の現れについて記述するものであり，情報構造に関わることは扱わない。この点を踏まえて，調査時に適宜総記解釈でないことを確認したデータを用いている。

「ノ」と「ガ」のどちらを使用するかが決まるのではなくて，むしろ「ノ」でマークされることによって主語位置の名詞が敬意の対象となり，それが述語動詞に尊敬の接辞を付す契機となっているということも考えられるかもしれない。しかし，「ノ」は主語となる名詞自体が敬意の対象とならない場合には用いられない。また，「ガ」を用いたとしても尊敬の接辞を伴うこともある。やはり，主語となる名詞自体が敬意の対象となるかによって「ノ」と「ガ」のどちらを使用するかが決まっていると考えるのが妥当であろう。

４．２　「ガ」「ノ」が連体節中の主語を表示する場合

出雲方言における「ガ」「ノ」が連体節中の主語を表わす場合，主節中の主語を表示する場合と同じように，その主語が話者にとって敬意の対象となる人物をreferするときには「ノ」を用いるのがふつうである（「ガ」を用いると主語位置に立つ名詞がreferする人物に対して「失礼」になるという）。一方，敬意の対象とならない場合には「ガ」「ノ」どちらを用いても許容される。

(5)　連体節（関係節）中の主語を表わす「ガ」「ノ」（例は大社方言から）

(a)　{オマエガ／ノ}　クー　クゥスィワ　コーダ
「お前が食べる菓子はこれだ」

(b)　コラ　{タローノ／ガ}　ツィクッタ　クゥスィダ
「これは太郎が作った菓子だ」

(c)　コーガ　{アイツィガ／ノ}　ツィクッタ　クゥスィダ
「これはあいつが作った菓子だ」

(d)　（コーガ）　{アノスィノ／??ガ}　ツクラエタ　クゥスィダ
「（これは）あの人が作られた菓子だ」

(e)　コーガ　{テンノーヘーカノ／*ガ}　ウメラエタ　マツィ
「これは天皇陛下が埋められた松（だ）」

(f)　（コーガ）　{サルガ／ノ}　カエタ　ズィダ
「（これは）猿が書いた字だ」

(g)　（コーガ）　{キカエノ／ガ}　カエタ　ズィダ
「（これは）機械が書いた字だ」

上記で示したように連体節中においても，節中の主語を表示する「ガ」と「ノ」は敬意によって使い分けがある。ただ，主節中の主語を表示する場合と異なり，連体節中の主語を表示する場合には主語が敬意の対象とならない場合に「ノ」「ガ」の両方を用いられ，敬意の対象となっている場合には「ノ」しか用いられない[10]。「ノ」「ガ」の両方が用いることができる環境としては，連体節中の主語表示は連体助詞の場合に近い。ただし，連体節中の主語表示の場合，人間でない動物・無生物をreferする名詞に続くときには「ノ」だけでなく「ガ」も用いられる点が，連体助詞の場合とは異なる。

以上で述べたことは（5）にある所謂関係節的なものについてばかりでなく，（6）のように当該の連体節が関係節的でない場合でも当てはまることである。

[10] 既に4.1節で見たとおり，主節中の主語を表示する場合には主語が敬意の対象となる場合には「ノ」「ガ」の両方が用いられるが，敬意の対象とならない場合には「ガ」しか用いられない。

（6）　連体節（非関係節）中の主語を表わす「ガ」「ノ」（例は大社方言から）

（a）　{ウツィノ／ガ}　　カケッチョーノオ　　ミッチョタカネ
「私が走っているのを見ていたか」

（b）　{タローノ／ガ}　　ジィローオ　　クラワセチョー（ノ）オ　ミタ
「太郎が次郎をなぐっているのを見た」

（c）　{センセーノ／??ガ}　　コラエタ（ノ）ニ　　キガツィカンダッタ
「先生がいらっしゃったことに気がつかなかった」

（d）　{センセーノ／??ガ}　　オイデタトキ　　ウルサカッタ
「先生がいらっしゃったときは，（教室が）うるさかった」

（e）　{テンノーヘーカノ／??ガ}　　コラエタ（ノ）ヲ　　ミタ
「天皇陛下がいらっしゃったのを見た」

（f）　{エノガ／ノ}　　ホエチョー　　ヤツィガ　　キコエタ
「犬が吠えているのが聞こえた」

なお，Shibatani（1975）あるいは南部（2007）によれば，現代標準語においては連体節中の主語を表示する「ガ」「ノ」について，「太郎 が／*の 友達と買った本」のように，当該の名詞句の後にさらに別の名詞句が続く場合，主語表示として「ノ」は使用しがたいという。一方，出雲方言においては，（6b）の例のように当該の名詞句に別の名詞句が続いた場合でも，「ガ」「ノ」のどちらもが問題なく使用可能である。主節中の主語を表示する場合においても，当該の名詞句の後にさらに別の名詞句が続いても，「ガ」「ノ」の両方が現れうる（（4e）も参照）。

５　おわりに

本稿では，出雲方言における格助詞「ガ」「ノ」の現れについて，その概要を記述した。非常に大雑把な記述ではあるが，本稿で述べたことのうち少なくとも連体助詞として用いられる場合の「ガ」と「ノ」の使い分けに，敬意（待遇）だけでなく名詞句階層中の位置が関係していることは，管見の限りにおいては，これまで出雲方言においては指摘されてこなかったことである。

本稿で述べたことは出雲方言の形態統語論に関する事柄のうち，ほんの一部のものであり，未解明のことも多く残されている。例えば本稿で扱った格助詞に関して言えば，まず連体節中の「ガ」「ノ」に関しては検討すべき問題が多く残っている。特に，この方言（の特に80代中盤以上の世代に見られる）ゼロ準体と呼ばれるものと「ガ」「ノ」の現れについては検討が不十分である。また，既に述べたとおり情報構造などを考慮した分析は本稿では保留してある。

格体系全般に関して言えば，対格（目的格）助詞として用いられることがある「オ（を）」の分布（どのようなときに「オ」が必須となるか）についても不明なところがある。ニクニ　スイチョー「肉が好きだ」などの助詞「ニ」の現れも興味深い。

出雲方言は様々な点で注目され，既に述べたとおり早くから研究のある方言ではあるものの，なお詳細な記述がない。今回の合同調査に参加した一人として筆者は，今後も出雲方言の調査・研究を続け，その地理的変異や歴史的形成過程も含めた全体像を明らかにしたいと考えている。

参考文献

Frellesvig, Bjarke（2010）　*A History of the Japanese Language*. Cambridge University Press.
平塚雄亮・森勇太・黒木邦彦（編）　(2015)『甑島里方言記述文法書』国立国語研究所.

廣戸　惇 (1949)『山陰方言の語法—出雲・隠岐・石見・伯耆—』島根新聞社.
神部宏泰 (1982)「島根県の方言」『講座方言学８　中国・四国地方の方言』国書刊行会，211-238.
加藤義成 (1935)「中央出雲方言語法考」『方言』5/4.
久野　暲 (1973)『日本文法研究』大修館書店.
水谷信明 (1980)「島根県大原郡木次町上熊谷中ノ段の敬語法の研究」広島大学文学部 昭和54年度卒業論文.
南部智史 (2007)「定量的分析に基づく「が／の」交替再考」『言語研究』131: 115-149.
Osterkamp, Sven (2014) On so-called genitive subjects in Classical Japanese and their treatment in Western grammars«. In: Majtczak, Tomasz and Sonoyama, Senri (eds.): *Language and Literary Traditions of Japan. Collection of papers to commemorate the twenty-fifth anniversary of Japanese studies at the Jagiellonian University* (1987–2012), 107–154. Kraków: Jagiellonian University Press.
Pellard, Thomas (2010) Ōgami（Miyako Ryukyuan）. In: Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 113-166.
坂井美日 (2013)「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学研究ノート』11: 66-83.
Shibatani, Masayoshi (1975) Perceptual strategies and the phenomena of particle conversion in Japanese. In: Robin E. Grossman, L. James San, and Timothy J. Vance (eds.) *Papers from the Parasession on Functionalism*, 469–480. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
下地理則・坂井美日 (2015)「九州琉球におけるガ系とノ系による主語表示 ―類型と歴史―」合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」（2015年8月21-23日）発表資料.